

子ども達の夢を育てる

青年技術者センター訪問記

佐々木 享

1

1980年4月4日。明日はモスクワに別れるという日の午後、モスクワ市内の青年技術者センターを訪問した。これは出発前には知られていなかった日程である。現地に行つてからの折衝の成果の一つらしいが、日本ではまだあまり知られていない施設なので、興味深く見学した。

大きな高層住宅の一階に設けられており、かなり広いように思われた。支配人のマクシー（ム？）・マクシーヴィツチさん、メソジスト（氏名失念）、設備係のアレクサンドロ・ペトローヴィツチさんなどが、私達を歓迎して下さいました。

この施設は、子ども達やもう働き始めた青年達が、放課後あるいは勤めが終つてから訪ねて行く技術関係を中心としたサークル活動の会館である。サークル活動に必要な道具や機械装置が各部屋に備えてあり、それぞれの専門の指導者がついてくれる。こうした点は、わが国でも比較的知られているピオネール宮殿と似ているが、サークルの種類が技術系に片寄っていること、それに、経営主体が労働組合であること、などは異なる点である。この辺の事情をふくめて、支配人は次のように説明していた。

「このセンターは、1972年に開設されました。私たちのこのセンターは、プロジェクト（投光器）という青年技術者センターで、投光器をつくっている企業の労働組合のものです。センターの従業員、具体的に言いますと、支配人、副支配人、管理人、それから指導者の先生方は投光器をつくっている労働組合の負担です。そのほかに、サービス、それ

から材料や設備は全部この工場の負担です。」

「子ども達は、家からも工場からも何ももってきません。私たちの設備と材料の大部分は、例えば工場とか裁縫室にとって必要がなくなった材料とか設備です。例えば、裁縫室の場合は、必要でなくなった生地などが提供されます。そのため、私たちが1年間にこの材料や設備のために消費する金額は4000ルーブルにしかありません。750人の子どもたちのために1年に4000ルーブルしか使わないのですから非常に僅かなものです。

私たちの設備として必要な機械は全部入っています。工作機械、例えば工作機械の旋盤も、フライス盤も、グラインダーもあるし、換気システムもあります。これ（換気システム）は一番大切なものの一つです。」

「ここで働いている人は16名です。うち5名が常勤、11名は嘱託です。」

2

私達は、はじめに支配人からこのセンターの活動の概略をうかがい、それからセンターの各部屋を見学して廻った。見学した感想もあるわけだが、この種の施設そのものがわが国ではまだあまり知られていないという事情があるので、以下では、できるだけ、見学しながら聞いた説明を紹介することを中心にのべようとおもう。

私達がまず、ここで行われているクラブ活動の概略を支配人からうかがった。

「いま、このセンターには、15種類のサークルがあります。いま、みなさんがいらっしゃる教室では、映画・写真のサークルが行なわれています。私達のサークルの半分ぐらい

は技術に関係があるサークルです。残りの半分のサークルは芸術に関係があります。」

「(質問に応じて)映画, 写真, 裁縫, 刺しゅうとニット, 技術の模型, 船の模型, 民芸品, タイルの模様, 無線, 無線電子器機, 飛行機の模型, 車の模型のサークル, 運転を教える会, 絵をかく会。それに, ここから3~4キロメートル離れたところでやっている機械建設(建設機械か?)サークルも, このセンターのもです。これらが日程にしたがって行われています。」

「これらのサークルを訪れる生徒達は50のグループに別けられています。ひとつのグループのメンバーは, 最低15名くらいです。全部で750人くらいの子ども達がこのセンターを訪れます。このセンターを訪れる子ども達のうちには, 学校に通っている子どももいるし, 青年の年令の, あらゆる種類の工場で働いている労働者もやってきます。」

このセンターは学校と同じで, 9月1日から6月1日頃までやっています。夏になると学校の生徒達の大部分は市内や郊外のキャンプ場で休むことにしています。その時, このセンターのサークルは, そのキャンプ場でやります。

授業は週2回, 2時間ずつ行なわれています。1年に全部で144時間, 子ども達はここで勉強します。」

ここで「授業」と言われているのは, もちろん, サークル活動のことをさしている。

「私達のセンターは, 朝の9時頃から夜の9時頃までやっています。しかし, 子ども達の大部分は, 学校の授業が終ってから, こちらへ来ます。午後3時頃から9時頃までの間です。さきに申し上げた勉強の時間は, 1年めの子ども達の勉強時間です。2年めにここで勉強する子ども達は, 週2回, 3時間ずつ勉強することになっています。したがって年に216時間になります。」

サークルに入りたい子ども達は8月20日頃

から10月1日頃までの間に, ここのサークルに入ります。どのサークルを選ぶかということは全く自由です。子どもたちの権利です。」

サークル活動の内容について。

「子ども達の手でつくられている品物の大部分が模型であることは当然です。例えば, ラジオの模型, 船の模型, 飛行機の模型, 車の模型などです。そのほかに, 子ども達が自分自身のために何かをつくりたかったら, 私たちは大いにこれを促進します。」

こうした仕事のほかに, 私達の生徒達はいろいろな美術館や博物館を訪れたり, いろいろな見本市や展覧会を訪ねたりします。

なお, この行政地区内やモスクワ市内で行なわれるあらゆる技術的・芸術的な競争によく参加することになっています。私達の工場の附属に文化会館があります。あそこで, 私達のセンターを訪れる子ども達は, よくアマチュアのコンサートに参加します。

このセンターの授業は無料で行なわれています。きょうみなさんがご覧になるものは全部, 例えば, きれいな絵とか機械はみんな, こちらで働いている先生の指導の下で子ども達の手によってできたものです。

最後に, 私達のセンターの基本的なねらい, 目的を申し上げたい。

このセンターの基本的な目的は, 子ども達がひまがあれば外での遊びの代わりに私達のセンターを訪れたり, すきな仕事をするチャンス子ども達に与えることにあります。このセンターでの活動を通じて, 子ども達は労働の味をわかることができると思います。

なお, 学校を卒業してこのセンターのサークルで特にすぐれた生徒達に, 例えば大学に入学する希望があれば, 私たちはここから推薦状を渡します。これはひじょうに役に立つとおもいます。」

3

つぎに, 私達が見学して廻った部屋の概略

を紹介しておきたい。

①私達がはじめに支配人の説明をうかがった部屋は、いつもは映画と写真のサークルが使っている部屋とのことだった。説明を聴くのに熱中(?)していたためか、どういう部屋だったのか印象がはっきりしない。もちろん、子ども達はここにはいなかった。

②「若い裁縫師」のサークルと「若い青年の刺しゅう」のサークルの部屋。子ども達の丹精こめた作品がたくさん飾ってあったが、子ども達はここにはいなかった。ここでは次のような説明があった。

「この各サークルのグループの数は4つずつです。ひとつのグループの生徒数は15名で、合計60名です。授業は週に2回、2時間ずつ行なわれています。ここに展示されている品物は、このサークルを訪れる子ども達の手でできたものです。みんな違った種類の裁縫機械があり、よく保存されています。」

「このサークルを訪れる子ども達のほとんどは、最後に、自分自身のために洋服をつくりたい。このサークルはひじょうに人気があるそうです。」

「この部屋を訪れるのは全部女子ですか」との問いに、「はい。でも刺しゅうの授業には6年生の男子も少し参加しています」とのこと。「ここへは何年来てもいいのですか」との問いに、「3~4年間来る子もいますが、大部分は2年間です」とのこと。

③ 技術の模型のサークルの部屋。子ども達はここにはいなかったようにおもう。

「これは、このセンターで最も狭い部屋です。1~4年生の子ども達が勉強する場です。こちらで作られる模型は、たいてい、浮かんんだり、飛んだり、走ったりするものです。たくさん部品を使いながら仕事をします。

このサークルに入りたい子ども達はものすごく多いです。多すぎる程です。一番熱心な子ども達はこのサークルを訪れます。」

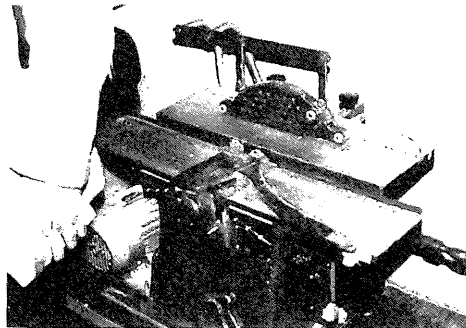
ここにおられた指導者に、どういう勉強を

して来られた方なのかをうかがってみました。

「私は、モスクワの専門通信大学を卒業しました。卒業後、研究所に勤めていましたが、住んでいる所から遠かったのでやめ、こちらへきました。しかし私は、小さい時からこういう模型のサークルを訪れました。その時から私の心には、この仕事への関心が生まれました。」

このサークルへ来る子ども達には、まず最初に、あらゆる器具や簡単な機械のとりあつかい方を説明し、それから図面の読み方を説明し、さらに材料学という科目を教えます。こちらで勉強している3~4年生の子ども達はやがて飛行機や船の模型のサークルに移ることにしています。」

④ 船の模型をつくるサークルの部屋。ここにも、私達が訪れたときには、子ども達はここにはいなかったようにおもう。工作台、丸のこ盤(



丸のこ盤

ちゃんと安全装置がついている)、ボール盤、旋盤、グラインダー、小型の電気炉、などがおかれていた。

「このサークルを訪れる子どもの数は60名で、4つのグループに分けられています。これは旋盤、あちら(室内)には4メートルほどのプールがあります。こちらは塗料室で、換気システムが設置されています。」

この台は回転します。このほか、近いうちに折り畳み式のテーブルをつくりたいとおもっています。

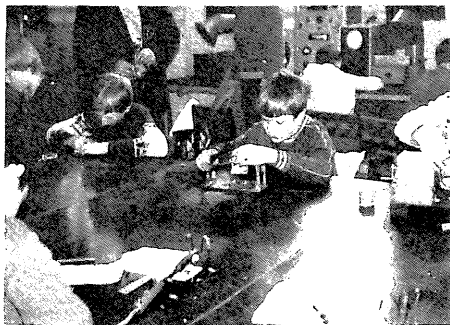
このサークルを卒業した子ども達の大部分は、ひじょうにすぐれた模型家になります。あらゆる設計工場が模型の専門家を求めています。」

質問に答えるかたちで。「このサークルには5～10年生が多く、あそこのいわゆる模型学の初歩のコースをおえてここへ来ます。この船の模型の教室、隣の飛行機あるいはラジオの模型の教室(のサークル)は、行政地区、市内、全ソ連の技術の競争によく参加します。また、船の模型に関する展覧会や見本市にもよく出かけます。」

㉔ いわゆる民芸品のサークルの部屋。この部屋にも子ども達はいなかった。まわりの戸棚にはたくさんの木彫り人形が並べられ、テーブルにはすてきな版画が並べられていた。

「木彫りのあらゆる種類の仕事がこので行なわれています。それからガラス関係の仕事や、タイルの模様づけもやっています。ここで使われる材料の大部分は工場のくずです。

㉕ 無線のサークルの部屋。この部屋では子ども達が実際に作業をしていた。部屋のまわりには、大きな電気関係の計測機器がところ狭しと並んでいた。大きい子どもと小さい子どもとが話し合いながらハンダ付けをしたり、何やら組み立てたりしていた。

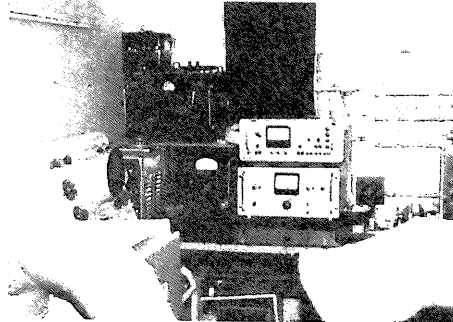


無線のサークル

「このサークルへやって来る子ども達の総数は約90名。6つのグループに分れています。この子ども達は6～9年生です。4年生が一

番小さい。若い天才です。(笑)。

こちらの大事な設備の一つは換気システムです。旋盤もフライス盤もあります。発電機も、つくったものを調整するために必要な機器は全て揃っています。」



電気関係サークルの実験調整用機材

「ラジオをつくる原理はどこで教えるのですか」という問いに、「直接ラジオをつくりながら先生が理論を教えるようにしています。学校で物理学の授業も受けているし、定期的に無線学の基礎も教えます。基本的な実験室は隣りにあります。こちらでは直接に無線機がつくれますが、調整は隣の部屋でやっています。」

「こういう機器をとりこわしたり、また組み立てたりする。そうしないと高い水準に行けません。」

この部屋におられた年輩の指導者にも経歴をうかがってみた。「私は、ずっと前に専門技術大学を卒業して、ずっとラジオの専門家として働いてきました。ですから、専門の免許もっています。いまでは養老年金者になりました。若い時からこのようなサークルをよく訪れました。」

㉖ 飛行機の模型のサークルの部屋。部屋の空中に、模型飛行機がぎっしりとつり下げられている。数人の男の子が作業をしていた。

「こちらの指導者のカラバーノフさんです。小さい時にこうしたサークルを訪れたことがあり、学校卒業後、こちらのセンターの指導



飛行機模型のサークル

者になりました。

ここには、60名の子ども達が訪れます。4つのグループに分れています。5～10年生で、さきほどの船の模型のサークルと同様に、最初まず模型の基礎のサークルを卒業してこちらへ来ます。

ここに展示されている飛行機の模型の大部分は、5日前に飛んで墜落したものです(笑)。ご覧のように、あらゆる種類の模型がつけられています。大部分の子ども達は、飛行機の模型の競争に参加します。」

㊦ 車の設計のサークルの部屋。

「ここで作る車の大部分はゴーカートです。このサークルは先生がいなかったため半年間程休んでいました。この4月から、自動車の専門の大学を出られた新しい指導者が入られました。

ここでつくられた車は市内の競技によく参加しました。あそこに競技会の写真があります。金属用の旋盤や木工旋盤もあります。あれはパイプを曲げる圧搾空気の機械です。」

「隣の部屋に近いうちに新しい自動車サークルをつくるつもりです。そこで子ども達に直接に車の運転を教えるつもりです。」

㊧ 芸術サークルの部屋。絵画を中心とした美術サークル。

「ここへは、1～10年生(7～18才)の200名の子ども達がやってきます。このサークルの基本的目的は、子ども達が芸術の味を

わかるようにすることです。第2の目的は、このサークルを卒業した子ども達が、簡単な絵を画けるようになったり、かざりものをつくることができるようにすることです。私たちは、いろいろな美術館も訪れたりします。」

たくさんの絵を飾ったきれいな部屋だったが、子ども達はいなかった。

㊨ 作品展示のホール。このセンターの各サークルの制作物が展示されていた。

4

見学の途中や終了後、私達はたくさんの質疑応答をした。その中からいくつかをひろいあげてみよう。

このセンターにやって来る子ども達について。

「年齢の幅は、1年生から10年生までです。しかし大部分は5～7年生です。性別では約60%が男子、約40%が女子です。」

「私たちのセンターのサークルを訪れる子ども達は、投光器をつくっているこの工場で両親が働いている子ども達だけではなく、どこからでも来ます。」

「750名のうちの大部分(約700名)が学校の生徒で、残りが労働者です。」

「何校ぐらいから来ているのですか」の問いに「約30校から。大部分は近くに住んでいる生徒達です。けれども、なかには、モスクワ市郊外(環状線の外側)から来る子どももいます。」

「労働者達はどんなサークルを訪れますか」の問いに、「工場で働いている青年達は、車の設計のサークル、芸術関係のサークル、無線のサークルの順に、よく訪れます。」

このセンターとピオネール宮殿との関係についても、いくつかの質問が出された。

「原則的に同じとは言えません。支配人が言ったように、このセンターは労組のもの、工場の附属のものです。ピオネール宮殿は行政地区の教育委員会のものです。こちらのセ

ンターの方が豊かな施設だといえます(笑)。基本的な差はこれです。」

「私たちの方は青年技術者センターですので、技術のサークルの方が多いです。圧倒的多数のサークルは技術に関係のあるものです。ピオネール宮殿の方は、スポーツや芸術に関するものが多いです。」

「ピオネール宮殿へ行くか、ここへ来るかは子どもが選ぶのですか。それとも学校が決めるのですか」の問いに、「全く子ども達の希望しだいです。私達はこのセンターの宣伝を決してしません。でも、近くの学校の生徒たちは先生の指導の下にこちらへ見学に来ます。」

青年技術者センターの創設の背景や経営等についても多くの質疑が行なわれた。

「こうしたサークルがつくられてきた経過は？」という問いに、「最初は、この建物は教育委員会の附属の技術センターになる予定でした。けれどもさき程申し上げましたように、教育委員会の経済からみると教育委員会にはお金が足りなかつたので、工場に渡すことにしたのです。ところでこちらは、工場の従業員のアパートです。計画によると、この建物では、今やっているサークルのすべてをやらなければなりません。この教室についてだけは、私たちが初めの計画を修正して、映画と写真のサークルをつくることにしたのです。」

「その計画はどこで決められましたか」との問いに、「お答えしにくい質問ですが、私の知る限りでは、このセンターは行政地区の教育委員会の命令でできたものですから、多分この教育委員会によってこうしたサークルが選ばれたのだと思われます。私は、最初からここで働いているのですが、誰が計画したのかははっきりしません。」

「この工場の規模は」の問いに、「はっきりわかりませんが、数千人が働いています。モスクワでは大きい方です。」

この種の施設は、モスクワでは25か所位あ

る由。ロシア共和国はもちろん、「全ソ連の範囲でこのようなセンターがあります」とのこと。

「ほかのセンターも工場の労組の経営ですか」との問いに、「どこでも同じです。ソ連の中央労働組合と文部省によって採択された法令によると、こういう種類のセンターはみな労組の負担のものです。法令によると、大きな工場はみな、命令として、このようなセンターをもたなければなりません。」

その法令は何年につくられましたかとの問いに、「およそ7年前に実施されました」とのこと。このセンターは1972年創立ということだから、法令の実施後すぐに創設されたことになる。

「ほかの工場からの協力は得られますか」との問いに、「この工場だけでなく、モスクワ中の工場とこのセンターとの関係はひじょうに密接です。他の工場で必要でなく、私達にとって必要なものは無料でもらいます。買わなければならないものは、すべて中央子ども百貨店と文房具店で買います。」

機械はどうなんですかとの問いに、「ソ連には、学校などのためにいろいろなもの、文房具品、機械、実験のための設備を売る店があります。そういう店で品物を買ったら、勘定を書き、店の方から工場へその勘定を送り、工場から金を送ることになっています。」

「若い裁縫師」のサークルと「若い青年の刺しゅう」のサークルの部屋で、そこに置かれていたプログラムを指して、「このプログラムはこのセンターのプログラムですか」と尋ねたところ、「そのプログラムには<管財教育施設と学校のためのプログラム——家庭美術>と書いてあります。こうしたプログラムはすべて中央ピオネール宮殿によって開発されたもの、しかも文化省によって採択されたものです。」

5

見学が一通り終り、質疑もすませたところ

で、私達は、日本から用意していったいろいろな贈りもの、技術教育研究会と子どもの遊びと手の労働研究会の会報や雑誌、日本の大工道具等の道具類をプレゼントした。直江さんが墨つぼで墨つけのやり方を説明した。支配人らは大へん喜んで下さり、返礼に、センターの子ども達のいろいろな製作品を下さった。

文字通り紹介に終始してしまっただが、ほんの少しだけコメントをつけておきたい。

この青年技術者センターに限らず、私達が今回訪問した所は、どこでも、日本の『学校要覧』のようなものをもろうことができなかつた。くれなかつたのではなく、そういうものを作る習慣がないのかも知れない。そこで私達は、いきおい、通訳を介しての口頭説明に頼らざるを得なかつた。ここでの紹介は、現地ですとったテープのうちの通訳された部分をよりどころにしている。「」内がそれである。しかし、「」内も、全く聞いたとおりではなく、あちこち順序を並べ直したり、不用部分を切ったり、多少のテニヲハを修正したりしている。しかし、何しろオレグさんの通訳が抜群だつた（別に他の誰かと比較してみただけではないが）ので、だいたいのところは忠実な再現と考えていただいでよい。とくに私達にとっては、オレグさんが技術系の学校を出ている人なので、技術上の訳語にとまどうことが少かつたことは幸であつた。

ただ、いくら有能な通訳であつたとしても、何しろ原稿なしの通訳だから、ときにとまどう点も一、二あつた。「あらゆる」ということばの多かつたことも気になつた一つである。「多くの」と言つた方がいいのではないかとおもわれる点が少くなかつたが、原語が「あらゆる」だつたのかも知れないとおもひ、そのままにした。「中央労働組合」などということばも、組織の名称としては不自然なようにおもへたが、そのままにした。「旋盤機械」などと言われたところは「旋盤」としたが、メソジストという資格の人が紹介されたの

で、メソジストとは何ですかという質問が出された。私も知りたいところだつたが、各部屋を廻っている途中での質疑応答で時間がなかつたためか、要領を得ない答えだつたので、紹介できなかつた。

ところでこの施設の名称のことだが、「青年技術者センター」と書いてはきたものの、これでいいのかなと迷つてしまふ。私がよく調べていないためかもしれないが、訳語が一定していないのである。「青年技術者センター」というのは、通訳のオレグさんのことばである。技教研の会報135号に寄せた訪問記のなかで河野さんは「青年技術者の家」と書いている。いっしょに行つた手労研の人々とはいうと、同会の会報81号にのつた日程表には「青年技術センター見学」とあるが、同号にこの施設の訪問記を寄せた宮津さんは「青少年技術センター」と書いている。この施設の見学をおえて外から建物をみたら、「ドーム・ユーンバ・チェーフニカ“プロジェクトール”」と書いてあつた。プロジェクトールはこの場合は固有名詞（もとの意味は投光器）だから別として、私のあやしげなロシア語で直訳すると、「若い技術者の家」というようなことになるが、「少年技術者の家」のほうがニュアンスを伝えるかな、とも思う。そういえば、通訳してくれたオレグさんは、「文字通り訳しますと、青年技術者のハウスと申します」と言つていた。誰もがびつたりした名称をつけようと努力しているわけである。いづれにせよ、まだ日本にはあまり紹介されていられない（他の人はとにかく私には、見るのはもちろん、聞くのも初めてだつた）から、早いうちによい訳語をきめたらどうかと思う。

この施設についての感想だが、見学途中、「換気システム」の重要性を繰り返し強調していたことが印象的だつた。長い冬の間、部屋を閉めきつて暖房しなければならぬという事情があるにせよ、機械装置類の安全装置

が行きとどいていることとあいまって、安全と衛生に注意深い配慮がされていることのおかげなのであろうと私達は受けとめた。

労働組合の経営する会館という経営方式については、労働組合の社会的役割が資本主義国のそれと違っているのだからうまくコメントできないが、興味深いやり方だと思っ

た。

ピオネール宮殿といい、青年技術者センターといい、社会をあげて、子ども達を大切に育てることに、心とからだだけでなく、夢を育てることに配慮しているさまをまのあたりにみたことは、私達に大いに勉強になった。
(名古屋大学)

技術教育研究会・規約

第1条 この会は、技術教育研究会といい、事務局を東京都または、その隣接地に

第2条 この会は、教育基本法に基いて、国民的立場からひろく技術教育の理論と実際を研究することを目的とする。

第3条 この会は、前条の目的を達成するために、つぎのような活動を行なう。

1. 研究会、講習会、懇談会の開催
2. 機関誌の編集・発行
3. 研究成果の刊行
4. 研究サークルの育成
5. その他必要な活動

第4条 この会の目的に賛同するものは、会員となることができる。

第5条 この会につぎのような機関をおく。

1. 総会＝総会は、この会の最高決議機関であり、原則として年1回開く。
2. 委員会＝委員会は、総会につく議決機関で、総会までの会務の処理にあたる。委員は総会で選出される。
3. 常任委員会＝常任委員会は、この会

の事業を積極的に推進する。常任委員は委員の互選による。

4. 代表委員＝代表委員は常任委員の互選による。代表委員は会を代表する。
5. 事務局＝常任委員会のもとに事務局をおく。事務局は会務を執行する。
6. 支部＝会員が3名以上いる都道府県に支部をおくことができる。支部の運営は支部の合議による。

第6条 この会の運営は、会費、会の活動による収益および寄附金によってまかなう。会費は年2,000円とする。

第7条 この会の会計年度は8月より翌年7月末日までとする。

付 則

1. この会則は1970年8月7日より実施する。
2. この改正規約は1972年8月1日より実施する。
3. この改正規約は1974年8月1日より実施する。
おく。」